福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI
REPOSITORY

Fukui Prefecture and IGO (3) Review on the 43 rd Fukui Prefecture IGO Amateur Championship “Strongest Player’s Degree” and its ranking system

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 一朗, Takahashi, Ichiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00028895

福井大学地域環境研究教育センター研究紀要
「日本海地域の自然と環境」
No. 28,　101 - 120,　2021

福井県と囲碁（３）福井県囲碁最強位戦の順位決定ルールの成文化と問題点について；第43期の経過報告も兼ねて

Fukui Prefecture and IGO (3) Review on the 43 rd Fukui Prefecture IGO Amateur Championship “Strongest Player’s Degree” and its ranking system

高橋　一朗
（福井大学　工学部　物質･生命化学科）

はじめに

福井県囲碁最強位戦（福井新聞社主催、日本棋院福井県支部連合会共催）は、今年度（2021）で第43期を数える、福井県アマチュア囲碁界では長い伝統を持つ棋戦である。以前も述べたが、本棋戦の最大の特徴は、10名の選手による総当たりリーグ戦を行い、最上位の成績を収めた選手がタイトル者となる点にある（全国的に見ても珍しい）。一昨年度（2019）は、筆者が初優勝させていただいたこともあり、かつ、現在本棋戦の共催者として名前の挙がっている日本棋院福井県支部連合会の会長職を勤めていることもあって、既に本紀要に発表した２つの論考[1,2]を通じて助言を行ってきた。

さて、本棋戦の本戦（リーグ戦）における10名の選手の順位を、曖昧さを残さずにどのように決めるかは、それによって優勝ばかりでなく、次期リーグへの残留（1位～5位）や陥落（6位以下）に影響するものであるから、極めて重要な位置を占めるものであることは間違いない。ところが、筆者が主催者･共催者の協力を得て色々と調査した結果からは､「順位付けルール」を成文化したものが、リーグ戦創設当時（1979年）から現在に至るまで、全く存在していないという、驚くべき事実が判明したのである。

もちろん、そうではあっても､「根拠規定」が皆無だった、というわけでは断じてない。以下に挙げた2個のメルクマールを踏まえて開催が続けられてきた、という証言は、新聞社や連合会のベテランの方たちから、筆者が初めて本戦リーグ入りした2007年以来、しばしば伺ったことがある。即ち:

（１）同じ成績の場合、直接対決の勝者を上位とする。
　　これでできる限り順位付けを行い、決め切れない部分が残る場合には、
（２）前期順位を参照して今期の順位を決める。

言うまでもなく、実際的な運用は、支部連合会の役員や会員である諸兄諸姉が、福井県内で開催された幾多の大会で、長年にわたり慣用的に使われて来たローカルルールを、場面場面に応じて「援用」する形で行われていた。結果としては、これまでの所、幸運にも問題は発生しないで済んでいたことが認められる。

（キーワード：囲碁、福井、順位決定）

Ichiro Takahashi
（Faculty of Engineering, department of Material Sciences and Biotechnology, University of Fukui, Fukui, 910-8507）

ところが、時は移り、各支部の構成メンバーが高齢化し、後継者となるべき新人の台頭も充分でなかった結果、これまでの体制のままでは、大会開催の世話に支障を来すようになってきた。そこで、新組織として「福井囲碁協会」を設立し、日本棋院の会員でない諸兄諸姉にも参加してもらえる枠組みを作った上で、この新組織で大会開催を世話していただく体制に、令和の開始と共に移行したことは、前報[2)]で報告した通りである。ところが、いざ実際に大会の開催・運営を行ってみると、先に触れた「ローカルルール」の大半もまた、成文化されていないことが判明した。担当者が変わっても同様な運営ができ、かつ、各大会の運営責任者に過大な負担を掛けない（そうでないと、引きうけてもらえなくなる！）ためにも、大会運営規則の整備が大至急必要であることが、ようやく認識されるようになったのである。

関係者による打ち合わせの結果、福井県最強位戦（以下、最強位戦）の場合は、ルールを成文化する責任は、支部連合会（共催者）が受け持つことに決まった。そこで、今期のリーグ本戦参加者中の最多出場者であることにより、一番状況を良く把握していることが期待されて、筆者にお鉢が回ってきたような次第である。

本稿では、以下の順に論考を進めることとする。

２．第 43 期最強位戦の経過報告
３．ルールの成文化について
４．ルールに沿っての順位付けの実例を交えての説明
５．遠からず起こり得る順位付けのいくつかの事例の検討
６．考察
７．他のゲームで認められている方法を援用する可能性
８．結論（提言）
９．あとがき

２．第 43 期最強位戦の経過報告

２．１　第 42 期（2020 年度）の本戦と第 43 期（2021 年度）の予選会

昨年度（2020）は新型コロナウィルス禍のため、福井県アマチュア囲碁界では、年度当初に予定されていた大会の殆ど全てが中止・延期となり、7 月に入ってようやくある程度の活動が行える見通しは付いたものの、実際に開催できた大会はごく少数に止まった。こうした状況下、第 42 期県最強位戦は、何度も日程が延期されたものの、関係者の努力により、緊急事態宣言解除後の最初の大会として開催に漕ぎ着けることができた。但し、コロナ禍下であることを考慮し、対局時間をできるだけ短縮するため、リーグ方式ではなく創設以来初めてとなるトーナメント方式を採用し、一日で決着したことは、前報[2)]で報告した通りである。

10 名の総当たりで行われる例年の本戦リーグだと、次年度へ勝ち残り（シード）は 1 位～ 5 位の選手 5 名であるが、昨年度（2020）は、「5 位」を決める煩雑さ（三密も）を避けるためもあって、トーナメント戦の 1 ～ 4 位の選手 4 名のみをシードすることとし、代わりに予選会では、1 名多く 6 名の選手を選抜することになった。[3)]

第 43 期の予選会は当初の予定通り、今年の 3 月 21 日（日・祝）に、福井棋院で開催された。予選参加者は 13 名で、昨年度（2020）の 15 名を下回ったが、コロナ禍下の開催であることを考えると、止むを得ないところと思われる。コロナ終結後は、予選参加者数の速やかな回復を期待したい。本選リーグ参加者 6 名の選手の選抜は、予選リーグ＋決勝戦を行う例年の枠組み[1)]を維持して行われた。[4)]

本戦リーグ開幕直前になって、昨年度 2 位の小河内氏から出場辞退の申し出があり、予選会で補欠だった酒井氏が代わりに参加することが決定された。即ち、前年度シード者 3 名（1 位丸吉氏、3 位高橋、

4 位三村氏）に対し、新参加者 7 名（前期順位は一律 5 位）という構成のリーグ戦となった。来年度（2022）のシードは例年通り 5 名であるから、リーグ戦の「新入り」メンバーから少なくとも 2 名以上、来年度に残ることになる。

2．2　第 43 期（2021 年）の本戦の開始

4 月 11 日（日）、福井新聞社 1 F のプレス 21 にリーグ戦に参加する選手 10 名が集合し、競技方法の説明の後、新規リーグ入り 7 名の中から「成績同点者」が出た場合、順位決めには注意が必要であることを一同で確認の上、リーグ戦の第 1 日目の日程（各自 3 局ずつ対局）が開始された。

前々報[1)] で報告したように、本戦リーグでは、第 1 局～第 9 局の組み合わせと順番が始めから決められている。これは、選手 10 名を棋譜を含めてすべて囲碁欄で紹介するためには、5 局の棋譜（ゲームレコード）があれば充分ではあるが、採譜者の数が少ない（通常は 2 名）ため、いちどきに 5 局とも採譜するわけには行かない。どうしても、第 1 日目の 1 局目～ 3 局目に分けて採譜する必要があるので、その際に選手が網羅できているかどうか、確認し易くするため、数年前から行われている方法である（昨年度はトーナメント方式での開催であったため、なし）。

実際には、第 1 日目は偶々、渡辺氏が所用で午前中欠席することになり、対戦相手だった安田氏（不戦勝）が採譜の「ボランティア」を買って出てくれたおかげで、1 局目で 3 局採譜できたことにより、2 局目の終了までで、5 局の棋譜の準備を完了することができた。

対戦順番と勝敗を先に示した上で、経過を簡単に記録して行くことにしたい（表 - 1 、敬称略）。

表 -1　第 43 期県最強位戦対戦順番と勝敗

番号	名前＼相手	#1	#2	#3	#4	#5	#6	#7	#8	#9
1	丸吉	⑩	⑨	❽	❼	⑥	⑤	④	③	❷
2	高橋	❽	⑩	③	⑨	❼	⑥	⑤	④	①
3	三村	⑦	❻	❷	⑤	⑨	⑩	⑧	❶	④
4	廣田	❻	❼	❾	⑩	❺	❽	❶	❷	❸
5	安田	⑨	❽	⑩	❸	④	❶	❷	⑦	❻
6	大和	④	③	⑦	⑧	❶	❷	⑨	⑩	⑤
7	岡崎	❸	④	❻	①	②	⑨	⑩	❺	❽
8	前田	②	⑤	①	❻	⑩	④	❸	⑨	⑦
9	渡辺	❺	❶	④	❷	❸	❼	❻	❽	⑩
10	酒井	❶	②	⑤	❹	❽	❸	❼	❻	❾

2．3　本戦経過（1）第 1 日目（4 月 11 日）第 1 局～第 3 局

参加選手の成績は、以下に示した通りであった。[5, 6)]

3 勝 0 敗（2 名）：　大和、前田
2 勝 1 敗（2 名）：　丸吉、酒井
1 勝 2 敗（5 名）：　高橋、三村、安田、岡崎、渡辺
0 勝 3 敗（1 名）：　廣田

福井新聞社 1 F のプレス 21 を会場として開催された。勝ち越し以上の成績は 10 名中 4 名のみで、後は負け越しとなる、波瀾万丈のスタート。筆者は第 1 局第 2 局と連敗（！）したものの、第 3 局を勝って、上位を追いかける位置に付けた。とはいえ、目下上位にいる前田・酒井両氏に負けているのは痛い。というのは、前々報[1)] で説明したように、同じ成績で並んだ場合、直接対決の勝敗によって「頭

ハネ」されてしまうからである。筆者が知る限りの過去のリーグ戦で、7 勝 2 敗で優勝したのは 2007 年の佐々木涼真氏が最後であり、それ以降は出ていないから、差し当たり、シードの確保を目標に据えることにした。

２．４　本戦経過（２）第２日目（５月２日）第４局～第６局

参加選手の成績は、以下に示した通りであった。[5, 7)]

５勝１敗（１名）：　前田
４勝２敗（４名）：　丸吉、三村、大和、岡崎
３勝３敗（１名）：　高橋
２勝４敗（２名）：　安田
１勝５敗（２名）：　廣田、渡辺

対局会場は、当初の予定では第 1 日目と同じくプレス 21 であったが、コロナ禍が収まる気配を見せないことから、安全のため、音楽会等の催しで使われることの多い大ホール（風の森ホール）に変更して開催された。前田氏の連勝は止まったがこの日も 2 勝 1 敗と順調、通算で単独トップを維持した。岡崎氏が 3 連勝して一気に 2 位グループに上がってきたのが目に付く。筆者は 2 日目を 2 勝 1 敗とし、通算 3 勝 3 敗の五分に漕ぎ着けたものの、この日の岡崎氏に喫した 1 敗は痛い。目下の上位陣でまだ対局していないのは丸吉氏だけなので、上位陣が順調に勝ち星を伸ばすと、成績上届かなくなるからである。なお、負け越しの成績の 4 名も、上位との直接対決が残っているので、数字上はまだリーグ陥落決定ではないことを、申し添えておきたい。

２．５　本戦経過（３）第３日目（６月 13 日）第７局（～ 12:00）[5, 8)]

対局会場は、第 2 日目と同じく風の森ホール。福井県支部連合会で購入した「対局用シールド」を設置しての初対局となった。このシールドは、某・段ボールメーカーの製造によるもので、日本棋院の本院(東京･市ヶ谷)では 2F にある一般対局室にフルに設置されていることで有名である。[9)]構造は、中央部に透明フィルムを貼った組み立て式で、かつ、素材が段ボールなので、飲食店等にある総アクリル製のものに比べてはるかに軽く、取り扱いやすい。対局は、シールドの下部が切り取られて穴になっている部分に碁盤（約 47 ｃｍ× 45 ｃｍ）を半々の位置まで差し込んで行う。但し、感染防止のため、穴のタテの長さは必要最小限しかないから、高い位置から石を盤面に下ろす癖のある人は注意を要する（手がぶつかると、シールドが大きく相手方にずれ、迷惑をかけるので）。

前々報[1)] でも述べたように、第 3 日は、優勝争いと残留争いが煮詰まり、1 局ごとに順位が変動するので、例年、悲喜こもごものドラマが展開される。だから、ここからは、1 局ごとの成績を細かく見て行くことにしたい。

第 7 局終了時での参加選手の成績は、以下に示した通りであった。

５勝２敗（５名）：　丸吉、三村、大和、岡崎、前田
４勝３敗（１名）：　高橋
２勝５敗（２名）：　安田、酒井
１勝６敗（２名）：　廣田、渡辺

三村氏が前田氏との直接対決に勝ち、他に 3 名いた 4 勝 2 敗組も全員順調に勝ち、5 名がトップに並ぶ大混戦になった。筆者はとりあえず白星を増やして「残留」のチャンスを窺う。第 7 局の結果、負け越しの成績の 4 名のうち、酒井氏を除く 3 名のリーグ陥落が決定した。

２．６　本戦経過（４）第３日目（同上）第８局（～ 14:30）[5, 8)]

第 8 局終了時での参加選手の成績は、以下に示した通りであった。

６勝２敗（３名）：　丸吉、大和、前田
５勝３敗（３名）：　高橋、三村、岡崎

３勝５敗（１名）：　安田
２勝６敗（１名）：　酒井
１勝７敗（２名）：　廣田、渡辺

同星対決の丸吉－三村戦は丸吉氏が勝ち一歩リード。岡崎氏は優勢の碁を安田氏に痛い逆転負けで一歩後退。筆者は追い上げに成功し、最終戦（難敵！）に勝てば残留できる所まで漕ぎつけた。第 9 局では、6 勝 2 敗組と 5 勝 3 敗組の対戦が 2 局あり、しかも目下の上位 6 名のうち 3 名が前期順位 5 位と同一であるため、第 1 日目の開始前に、一同で確認した「成績同点者」が複数出て、順位を決めるために慎重に確認作業が必要となる恐れが出て来た。筆者を含めた 6 名が 6 勝 3 敗の成績で並ぶ可能性もあるが、果たして・・・・・

２.７　本戦経過（４）第３日目（同上）第９局（最終；～ 16:00）[5, 8)]

「一番長い日」風に書いて見よう。

5 局のうち､優勝･残留に関係のない 1 局（渡辺－酒井戦）は渡辺氏の不戦勝で既に終了していた（最終成績は共に 2 勝 7 敗)。残りは 4 局。毎年、最強位戦リーグの最終日は盛り上がりを見せるが、最終局は各選手が慎重になったこともあり、進行が遅いように思われた。持ち時間を一杯に使用して打つ筆者の場合は毎度のことではあるが。

最初に決着したのは前田－渡辺戦で、白番前田氏が 9 目半勝ちし、7 勝 2 敗。この時点で、筆者を含む「3 敗組」の優勝は消えた。岡崎氏は 5 勝 4 敗となり、競争相手である三村氏および筆者（どちらも 5 勝 3 敗で対局中）の結果に残留が懸っている。具体的には、今年度の岡崎・三村・筆者の 3 者間のリーグ戦で結果は対局順に、三村○－●岡崎、筆者○－●三村、岡崎○－●筆者、と「３すくみ」であるため、岡崎氏が残留するためには可能な 4 個の条件のうち「三村氏○＋筆者●」の条件が必要となる。

2 番目に決着したのは意外にも筆者－丸吉戦。早打ちの丸吉氏が持ち時間を半分近く残したことによるものであった。結果は筆者が黒番で 2 目半勝ちで、最終成績は共に 6 勝 3 敗。これにより、筆者より最終順位が下位となる選手が 5 名以上となることが確定し、残留が決まった。同時に、前段落の最後に書いた事情により、岡崎氏の陥落も決まった。

「6 勝 2 敗－ 5 勝 3 敗」の組み合わせの 2 局が終わったあと、しばらく間を置いて、3 番目に決着したのは三村－廣田戦。三村氏の白番 10 目半勝ちで、最終成績は三村氏 6 勝 3 敗であるが、実は順位の 5 位は本局の勝敗に拘わらず筆者－丸吉戦が終わった時点で決まっていた。

最後に決着したのは大和－安田戦で、大和氏が安田氏独特の粘りを退けて勝利（白番中押し勝ち)。最終成績は大和氏 7 勝 2 敗、安田氏 3 勝 6 敗。

次ページに、最終の星取り表を掲げておく。

２.８　順位について

最終順位決定に関する説明・コメントを以下、少しばかり書きます。

6 位･7 位･10 位は異なる成績が 1 人ずつであったが､それ以外は､同星による順位判定が必要となった（後出の表 -2 では該当するコラムを塗りつぶして表示、他も同様)。

1 位・2 位と 8 位・9 位は、直接対決の勝者を上位とした。

3 位～ 5 位は該当者が 3 名なので、3 名のみを含む「小さなリーグ表」を作成した所、その中での成績はそれぞれ、2 勝・1 勝 1 敗・2 敗であった。従って、この順番で全体順位と決まった（表 - ２)。

第 43 期の県最強位戦リーグでは、2007 年度以来 14 年ぶりに、7 勝 2 敗の成績での優勝が記録された。今期、筆者は第 1 日目に 2 連敗した時点で目標をリーグ残留に切り替えたのであるが、あと 1 つ「どこかで」勝っていれば優勝できていたことになる。丸吉氏にしても､最終局で筆者に勝っていれば､そこで優勝であった。繰り言になるので if で始まる話はこの辺りで止めておくが､以前のように､佐々

表 -2　第 43 期県最強位戦リーグ星取り表（最終）

今期	前期	＼	大	前	高	丸	三	岡	安	渡	酒	廣	勝－敗
1	5	大和	＼	○	●	●	○	○	○	○	○	○	7－2
2	5	前田	●	＼	○	○	●	○	○	○	○	○	7－2
3	3	高橋	○	●	＼	○	○	●	○	○	●	○	6－3
4	1	丸吉	○	●	●	＼	○	●	○	○	○	○	6－3
5	4	三村	●	○	●	●	＼	○	○	○	○	○	6－3
6	5	岡崎	●	●	○	○	●	＼	●	○	○	○	5－4
7	5	安田	●	●	●	●	●	○	＼	○	●	○	3－6
8	5	渡辺	●	●	●	●	●	●	●	＼	○	○	2－7
9	5	酒井	●	●	○	●	●	●	○	●	＼	●	2－7
１０	5	廣田	●	●	●	●	●	●	●	●	○	＼	1－8

木悠介氏のような絶対的第一人者が居なくなった現状では、これまでよりも星のつぶし合いは多くなるだろうし、遠からず 6 勝 3 敗の成績での優勝が記録される可能性も否定できない。

今後は、3 敗するまでは優勝の可能性を捨てず、3 敗したとしても一縷の望みを捨てない姿勢でリーグ戦に臨むことが大事だと思いました！

優勝･残留を含む順位の決定にかなり手間取るのではないかと懸念されていたが､結果的に杞憂（きゆう）に終わり、容易に確認可能な結末を与えた。これは、運営側・選手側の多大な努力の成果（いわゆる日頃の行い！？）と見ることも可能ではあるが、第 8 局が終わった時点では、一同が、身近に順位付けに関わる「クレバス」の存在を強く意識したことも間違いのない所であろう。どうしようもなくなる前に対策するのは人の世の常識である。本稿の後半は、そういう見地から、考察を述べ進めて行きたいと考える。

3．ルールの成文化について

3．1　何故必要なのか、再論

前々報[1)]で､「本戦がリーグ戦」は珍しいと書いたが、リーグ戦方式のものは、プロどうしの碁（棋戦という）でも存在している。但し、現存する棋戦の中でのリーグ戦は、タイトル保持者への挑戦者を決める過程で使われるものに限られており、リーグ戦の 1 位をタイトル者とするものは無い（かつてはタイトル保持者によるリーグ戦があった；1 位が「鶴聖位」を獲得）。[10)] 挑戦者決定リーグ戦にしても、同星での順位付けは、上位 2 名の決戦（挑戦者）や前期順位の上位者（残留）のように、前年度の同じ棋戦での成績を用いて判定するのが通例となっている。

県最強位戦の場合は、掛け値なしのナンバーワンを文句なく決める、という創設当時の主旨が今も生きている。挑戦者なら､「まだタイトルを取ったわけではないから」という考え方も可能だと思うが、いざタイトル、ということになると､「去年成績が良かったにせよ、今年は自分はあの人に勝ってる、釈然としない」という気持ちが起こるのは無理からぬところであろう。そこで何よりも、直接対決の勝敗をキーとして用い、これで決着できない場合に、前期順位を初めて「援用」して順位を決めることを基本方針にしたのではないかと考えられる。

今期の場合でも、1 位･2 位と 8 位･9 位は、直接対決の勝敗を考慮しないと順位が決められない（前期順位は同一）ので、これを比較考量する際の第一の指標としたこと自体は納得できるものがある。但し、もしこれが 3 人以上だったとすると、必ずしも明確な規定が文章の形で、現在手許にあるというわけではないから、結構困ったことであろう。

3．2　順位の決め方の手順書の案：　（　）は規則、＜　＞は細則を表わす

まず、順位の決め方の手順書の「案」を、箇条書きにした。

（1）勝数の多い選手が上位
　＜1Ａ＞同じ勝数の選手がいない→一義的に決定。
　＜1Ｂ＞同じ勝数の選手がいる→該当の選手以外の順位を決定し（2）に進む。

（2）同じ勝数の選手がいる場合、人数が2人か3人以上かで、区別して取り扱う。
　＜2Ａ＞同じ勝数の選手が2人の場合には、直接対決で勝った選手を上位とする。
　＜2Ｂ＞同じ勝数の選手が3人以上の場合には、（3）に進む。

（3）順位を比較検討する対象となる選手だけを含む小さなリーグ表を作成する。
　このリーグ表に対して、（1）を適用する。
　＜3Ａ＞同じ勝数の選手がいない→部分順位が一義的に決定→全体順位も決定。
　＜3Ｂ＞同じ勝数の選手がいる→該当選手以外の部分順位を決定し（4）に進む。

（4）（3）で残った選手の間で比較を行う。
　＜4Ａ＞同じ勝数の選手が2人の場合には、直接対決で勝った選手を上位とする。
　＜4Ｂ＞同じ勝数の選手が3人以上の場合には、（3）に戻る。
　＜4Ｃ＞（3）と（4）を行き来して、順位決定者が出ない場合（3すくみなど）は、（5）に進む。

（5）以上により順位を決定し得ない、同じ勝数（3すくみなど）の選手の間の比較は、
　次のように行う。
　＜5Ａ＞前期順位で上位の選手を、今期の成績で上位とする。
　＜5Ｂ＞前期順位が同一の選手が2人・・・直接対決で勝った方を上位とする。
　＜5Ｃ＞前期順位が同一の選手が3人・・・現行の規則の範囲では決めきれない。

最後に「決めきれない」が出て来たが、この種の規則・細則では、適用するのが速い順に書くのがセオリーであるから、「決めきれない」所まで到達したらどうするか、は後で触れることとしたい。

4．ルールに沿っての順位付けの実例を交えての説明

3．では、ルールを箇条書きで書き下す作業を行ったが、諸兄諸姉には、このような「書き付け」だけで実際の運用ができるとは、とても思われないであろう。そこで次に、実際のリーグ表を素材として、順位付けの進め方について、説明を加えることにする。

4．1　規則（1）でどこまで決められるのか？

（1）勝数の多い選手が上位
＜1Ａ＞同じ勝数の選手がいない→一義的に決定。
このことの説明には、Ａ～Ｅの 5 名によるリーグ表（表 - 3）を例として出しておけば充分であろう。
（有名私立中学の入試問題でよく出題される有名な問題です）

表 -3

名前＼相手	A	B	C	D	E	勝－敗
A	＼	○	○	○	○	4－0
B	●	＼	○	○	○	3－1
C	●		＼	○	○	2－2
D	●	●	●	＼	○	1－3
E	●	●	●	●	＼	0－4

＜1Ｂ＞同じ勝数の選手がいる→該当の選手以外の順位を決定し（2）に進む。

例として今年度（第 43 期）のリーグ表を掲げる。

表 - 4

今期	前期	＼	大	前	高	丸	三	岡	安	渡	酒	廣	勝－敗
	5	大和	＼	○	●	●	○	○	○	○	○	○	7－2
	5	前田	●	＼	○	○	●	○	○	○	○	○	7－2
	3	高橋	○	●	＼	○	○	●	○	○	●	○	6－3
	1	丸吉	○	●	●	＼	○	●	○	○	○	○	6－3
	4	三村	●	○	●	●	＼	○	○	○	○	○	6－3
6	5	岡崎	●	●	○	○	●	＼	●	○	○	○	5－4
7	5	安田	●	●	●	●	●	○	＼	○	●	○	3－6
	5	渡辺	●	●	●	●	●	●	●	＼	○	○	2－7
	5	酒井	●	●	○	●	●	●	○	●	＼	●	2－7
10	5	廣田	●	●	●	●	●	●	●	●	○	＼	1－8

5 勝・3 勝・1 勝は 1 名ずつだったから、その 3 名分の順位（6 位・7 位・10 位）だけがこの時点で決まった。1 位～ 5 位と 8 位～ 9 位は未決定である。

4.2　規則（2）でどこまで決められるのか？

（2）同じ勝数の選手がいる場合、人数が２人か３人以上かで、区別して取り扱う。
＜２Ａ＞同じ勝数の選手が２人の場合には、直接対決で勝った選手を上位とする。

引き続き、今年度（第 43 期）のリーグ表を例として用いる（表 - 5）。

ここからは、ブロックごとに分けて判定して行くことになる。この時点で、1 位・2 位と 8 位・9 位が確定した。3 位～ 5 位は未決定。

表 -5

今期	前期	＼	大	前	高	丸	三	岡	安	渡	酒	廣	勝－敗
1	5	大和	＼	○	●	●	○	○	○	○	○	○	7－2
2	5	前田	●	＼	○	○	●	○	○	○	○	○	7－2
	3	高橋	○	●	＼	○	○	●	○	○	●	○	6－3
	1	丸吉	○	●	●	＼	○	●	○	○	○	○	6－3
	4	三村	●	○	●	●	＼	○	○	○	○	○	6－3
6	5	岡崎	●	●	○	○	●	＼	●	○	○	○	5－4
7	5	安田	●	●	●	●	●	○	＼	○	●	○	3－6
8	5	渡辺	●	●	●	●	●	●	●	＼	○	○	2－7
9	5	酒井	●	●	○	●	●	●	○	●	＼	●	2－7
１０	5	廣田	●	●	●	●	●	●	●	●	○	＼	1－8

＜２Ｂ＞同じ勝数の選手が３人以上の場合には、（３）に進む。

図 - ５の場合、3 ～ 5 位は同じ成績であるため、規則（２）の範囲では、具体的な順位は決められない。そこで次に、規則（３）を適用する段取りに移る。

４．３　規則（３）でどこまで決められるのか？

（３）順位を比較検討する対象となる選手だけを含む小さなリーグ表を作成する。
　　このリーグ表に対して、（１）を適用する。
＜３Ａ＞同じ勝数の選手がいない→部分順位が一義的に決定→全体順位も決定。

引き続き、今年度（第 43 期）のリーグ表を例として用いる（表 - ６）。
3 位～ 5 位を決めるには、ここで、該当者 3 名だけを含む小さなリーグ表を作ってみる。すると、そのリーグ内での成績は、2 勝・1 勝 1 敗・2 敗で、同じ勝数の選手はいない。ここで、「規則（１）勝数の多い選手が上位」を適用することにより、3 位～ 5 位が決まることになる。

表 - ６

今期	前期	＼	大	前	高	丸	三	岡	安	渡	酒	廣	勝－敗
1	5	大和	＼	○	●	●	○	○	○	○	○	○	7－2
2	5	前田	●	＼	○	○	●	○	○	○	○	○	7－2
3	3	高橋	○	●	＼	○	○	●	○	○	●	○	6－3
4	1	丸吉	○	●	●	＼	○	●	○	○	○	○	6－3
5	4	三村	●	○	●	●	＼	○	○	○	○	○	6－3
6	5	岡崎	●	●	○	○	●	＼	●	○	○	○	5－4
7	5	安田	●	●	●	●	●	○	＼	○	●	○	3－6
8	5	渡辺	●	●	●	●	●	●	●	＼	○	○	2－7
9	5	酒井	●	●	○	●	●	●	○	●	＼	●	2－7
１０	5	廣田	●	●	●	●	●	●	●	●	○	＼	1－8

即ち、今年度のリーグ戦の順位は、細則＜３Ａ＞を適用した時点で全て決定できたことが分かる。本当は、もっと複雑になる可能性があったのだが、それは後で取り上げて検討することにしたい。

さて、参加者 3 名のリーグ表には、上で述べた「2 勝・1 勝 1 敗・2 敗」の組み合わせの他に、「3 者とも 1 勝 1 敗」があることは、諸兄諸姉もよくご存じの通り。いわゆる「３すくみ」である。各対戦での勝ち敗けが公平に 50 %ずつ（以下でも同じ）とすると､2 種類のリーグ表の生じる確率は「2 勝･1 勝 1 敗・2 敗」の 75 %に対して「3 者とも 1 勝 1 敗」が 25 %あるので､「３すくみ」はかなりの高率で発生することが明かである。

そこで今度は､「３すくみ」を含む一昨年度のリーグ表（第 41 期）を例として考察してみることにする。まず、細則＜１Ｂ＞を適用した時点で 1 位～ 3 位と 7 位・8 位が決定し、次いで細則＜２Ａ＞を適用した時点で 9 位・10 位が決定した所まで書き込んだものを例示する（表 - ７）。

＜３Ｂ＞同じ勝数の選手がいる→該当選手以外の部分順位を決定し（４）に進む。

表 - 7

今期	前期	＼	高	三	小	大	西	瀧	岡	渡	川	長	勝－敗
1	3	高橋	＼	○	○	○	○	●	○	○	○	○	８－１
2	6	三村	●	＼	○	○	○	●	○	○	○	○	７－２
3	6	小河内	●	●	＼	○	○	●	○	○	○	○	６－３
	1	大久保	●	●	●	＼	●	○	○	○	○	○	５－４
	2	西野	●	●	●	○	＼	●	○	○	○	○	５－４
	4	大瀧	○	○	○	●	○	＼	●	●	○	●	５－４
7	6	岡崎	●	●	●	●	●	○	＼	○	○	○	４－５
8	5	渡辺	●	●	●	●	●	○	●	＼	○	○	３－６
9	6	川畑	●	●	●	●	●	●	●	●	＼	○	１－８
１０	6	長谷川	●	●	●	●	●	○	●	●	●	＼	１－８

4 ～ 6 位となる 3 選手は総合成績が同一でかつ、小さいリーグ表でも同星である。「該当選手以外」はゼロであるから、細則＜３Ｂ＞で新たに決められた順位は皆無であった。そこで、規則（４）の領域へ進入することになる。

４.４　規則（４）でどこまで決められるのか？

（４）（３）で残った選手の間で比較を行う。
＜４Ａ＞同じ勝数の選手が２人の場合には、直接対決で勝った選手を上位とする。
＜４Ｂ＞同じ勝数の選手が３人以上の場合には、（３）に戻る。
＜４Ｃ＞（３）と（４）を行き来して､順位決定者が出ない場合（３すくみなど）は､（５）に進む。

間違いない規則を重ねて表現するとなると、上に掲げた 4 行がどうしても必要である。文章で箇条書きしたものだと分かりにくいが、先に例として挙げた表 - 7 を見れば、状況は一目瞭然。即ち､「直接対決で勝った選手を上位」だけでは､「３すくみ」の場合、（３）と（４）をいくら繰り返しても順位付けが進まないため､「堂々巡り」となり、ここで作業がストップしてしまうのである。

ここでもし、細則＜４Ａ＞と＜４Ｂ＞を適用して決まった順位が 1 個でもあれば、残った選手に対して規則（３）を再度適用することにより、更に順位を決められるチャンスが生じてくることは、お分かり頂けると思う。しかしながら、表 - 7 の場合には、新たに決まった順位は 1 つもなかったから、

規則（3）と（4）を行き来するところで立ち往生せざるを得ない。故に、細則＜４Ｃ＞はこの無限ループから脱出するために不可欠の一環ということになる。

ここに至りようやく、「前期順位」が、今期の順位を決定するための重要なインデックスとして登場することになる。

４.５　規則（5）でどこまで決められるのか？

（5）以上により順位を決定し得ない、同じ勝数（３すくみなど）の選手の間の比較は、
次のように行う。
＜５Ａ＞前期順位で上位の選手を、今期の成績で上位とする。

表 - 7 を再掲したものを表 - 8 として使用する。

表 - 8

今期	前期	＼	高	三	小	大	西	瀧	岡	渡	川	長	勝－敗
1	3	高橋	＼	○	○	○	○	●	○	○	○	○	８－１
2	6	三村	●	＼	○	○	○	●	○	○	○	○	７－２
3	6	小河内	●	●	＼	○	○	●	○	○	○	○	６－３
4	1	大久保	●	●	●	＼	●	○	○	○	○	○	５－４
5	2	西野	●	●	●	○	＼	●	○	○	○	○	５－４
6	4	大瀧	○	○	○	●	○	＼	●	●	○	●	５－４
7	6	岡崎	●	●	●	●	●	○	＼	○	○	○	４－５
8	5	渡辺	●	●	●	●	●	○	●	＼	○	○	３－６
9	6	川畑	●	●	●	●	●	●	●	●	＼	○	１－８
１０	6	長谷川	●	●	●	●	●	○	●	●	●	＼	１－８

即ち、今年度の成績では差は付けられないものの、前年度の順位に 1 位･2 位･3 位と差があるので、この順番に「部分順位」を付け、これを更に全体の順位の中に反映させることにより、4 位～ 6 位が決定。以上により、ようやく第 41 期の順位付けが完了できたことになる。「３つどもえ」の時に初めて前期順位の出番が来る、という状況を、実感できる形で表示するだけでも、相当の努力が必要であった。

先に提案した規則・細則には、適用例が本論考でここまで登場しなかった細則として、＜５Ｂ＞と＜５Ｃ＞の 2 個が含まれている。これらは、前期順位が同一の選手が、今期の同成績者の中に 2 名以上いる場合に適用されるものである。では、一体いつ必要になるのだろうか？

＜５Ｂ＞前期順位が同一の選手が２人・・・直接対決で勝った方を上位とする。
＜５Ｃ＞前期順位が同一の選手が３人・・・現行の規則の範囲では決めきれない。

４.６　現行の規則の範囲では決めきれない事態はごく身近に潜在している

諸兄諸姉もよくご存じの通り、現代の囲碁は、「引き分け」が極めて少ないゲームである。

かつては、黒地と白地の目数（または盤上に配置し得た黒白の活き石の数）が同一の場合に「ジゴ（＝引き分け）」というのがあった。しかしながら、トーナメントなどでの打ち直し（再戦）を防止するためと、黒番の有利さ（先に 1 手目を打つから）を調整するために、黒地の目数から差し引く数値（コミ）が導入された後、コミに端数（0.5 や 0.25 など）を付けることが一般的になった時点で「ジゴ」は消

滅した。それ以来、「引き分け」が起こるのは、日本式ルールの「無勝負」のみとなり、具体的には、（コウ）以外の同型反復（三劫、循環劫、長生）が生じた場合と定められているが、発生する機会は、1 万局に 1 回も無いだろう（外国ルールでは同型反復そのものを禁止）。[10] 従って、直接対決で勝敗がつかない場合を考える必要は、事実上無いことになる。

以上により、最強位戦リーグの場合、前期の順位が同一というのは、予選通過者（通常 5 名で順位はすべて 6 位）の場合に限られることが分かる。換言すれば、細則＜５Ｂ＞と＜５Ｃ＞は、予選通過者のうち 2 名以上が優勝・残留に関係する場合に必要となる。しかしながら、1979（昭和 54）年の第 1 期以来のデータを調べると、予選通過者のうちの複数が次期リーグに残留した例は少なくないものの、このような理由に基づく同一順位の例は一度も起きていないことが確認される。[11] 従って、これまでは最大、細則＜５Ｂ＞までで、順位付けが間に合っていたと言える。

しかしながら、今年度（第 43 期）のように、本戦リーグへの新参加者が通例の 5 名でなく 7 名も居るとなると、細則＜５Ｃ＞の出番が来る蓋然性は否定できず、その場合には、明らかに、順位を決め切れなくなるではないか！

どのような分野・世界でも「端境期」は必ずある。事実、囲碁の場合でも、トッププロによるタイトル保持者への挑戦者を決定するための総当たりリーグ戦（棋聖戦、名人戦、本因坊戦などで行われている）では、構成メンバーは何年も同じような顔ぶれが続くことが多い（要は、リーグを陥落してもすぐ予選を突破してリーグに戻っている、ということ）が、突如、大半のメンバーが入れ替わる時期が来ることもまた、通常よく起きている現象である。棋戦（アマチュアの場合は大会）を運営するための規則・細則が不完全で、事が起きてからあわてて泥縄式に対応を検討したのでは、明かに公平ではないし、主催者の信用を失うことにもなるだろう。規則というものは、大会や棋戦が始まる以前に確定したものを、あらかじめ、参加予定者に明示しておくべきものである。従って、起こり得る可能性を、機会を捉えて検討を加えておくことは、「転ばぬ先の杖」として、是非とも必要と考える。

５．遠からず起こり得る順位付けのいくつかの事例の検討

ここでは、今年度（第 43 期）に「起こり得た」リーグ表のパターンを示し、参加選手全員の順位が決まるまでの手間の掛かり方をご鑑賞願うこととする。まず、既に掲示したリーグ表（表 - ２）だが、前期順位の順番に選手名と星取りを掲げた書き方に改めたもの（表 - ９）を掲示する。

表 - ９

前期	＼	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	勝－敗
1	A	＼	●	○	○	○	○	●	●	○	○	６－３
3	B	○	＼	○	○	○	○	●	●	○	●	６－３
4	C	●	●	＼	○	○	●	○	○	○	○	６－３
5	D	●	●	●	＼	●	●	●	●	●	○	１－８
5	E	●	●	●	○	＼	●	○	●	○	●	３－６
5	F	●	●	○	○	○	＼	○	○	○	○	７－２
5	G	○	○	●	○	●	●	＼	●	○	○	５－４
5	H	○	○	●	○	○	●	○	＼	○	○	７－２
5	I	●	●	●	○	●	●	●	●	＼	○	２－７
5	J	●	○	●	●	○	●	●	●	●	＼	２－７

ここから「仮想の世界」に入って行くことも考慮し、選手名は A ～ J、前期順位は 1 ～ 4 位（前年度 2 位の選手は欠場）に改めてあるが、議論の実質に影響がないことはお認め頂けよう。

５．１　６名が同星となるリーグ表の例と順位付け

実際の勝敗と 2 か所だけ入れ替える（●○）ことにより、6 勝 3 敗が 6 名（！）となるリーグ表が作成できる。なお､規則（１Ａ）（２Ａ）を適用することにより決定した残り 4 名の順位 7 ～ 10 位は、あらかじめ書き込んでおいた（表 - １０）。

表 -10

今期	前期	＼	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	勝－敗
	1	A	＼	●	○	○	○	○	●	●	○	○	6－3
	3	B	○	＼	○	○	○	○	●	●	○	●	6－3
	4	C	●	●	＼	○	○	●	○	○	○	○	6－3
１０	5	D	●	●	●	＼	●	●	●	●	●	○	1－8
7	5	E	●	●	●	○	＼	○	○	●	○	●	4－5
	5	F	●	●	○	○	◍	＼	○	○	○	○	6－3
	5	G	○	○	●	○	●	●	＼	○	○	○	6－3
	5	H	○	○	●	○	○	●	◍	＼	○	○	6－3
8	5	I	●	●	●	○	●	●	●	●	＼	○	2－7
9	5	J	●	○	●	●	○	●	●	●	●	＼	2－7

次に、6 勝 3 敗となった 6 名のみを含む小さな？リーグ表を作って見る（塗りつぶしが相当)。すると表 - １１のようになる。

表 -11

今期	前期	＼	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	勝－敗
	1	A	＼	●	○	○	○	○	●	●	○	○	6－3
	3	B	○	＼	○	○	○	○	●	●	○	●	6－3
	4	C	●	●	＼	○	○	●	○	○	○	○	6－3
１０	5	D	●	●	●	＼	●	●	●	●	●	○	1－8
7	5	E	●	●	●	○	＼	○	○	●	○	●	4－5
	5	F	●	●	○	○	◍	＼	○	○	○	○	6－3
	5	G	○	○	●	○	●	●	＼	○	○	○	6－3
	5	H	○	○	●	○	○	●	◍	＼	○	○	6－3
8	5	I	●	●	●	○	●	●	●	●	＼	○	2－7
9	5	J	●	○	●	●	○	●	●	●	●	＼	2－7

これを見ると、小さなリーグ表内の星取りは、3 勝 2 敗がＢ、Ｆ、Ｇの 3 名、2 勝 3 敗がＡ、Ｃ、Ｈの 3 名であることがわかる。ここから先の作業を段階別に整理したものをまず表 - １２として示しておくことにする。

表 -12

選手名	今期成績（勝－敗）	小リーグ１（勝－敗）	小リーグ２（勝－敗）	前期（位）	決定分（位）	直接対決	今期順位（位）
B	６－３	３－２	１－１	3	1		1
F	６－３	３－２	１－１	5	２か３	勝	2
G	６－３	３－２	１－１	5	２か３	敗	3
A	６－３	２－３	１－１	1	4		4
C	６－３	２－３	１－１	4	5		5
H	６－３	２－３	１－１	5	6		6

当然、3 勝 2 敗組 3 名は 2 勝 3 敗組 3 名より成績上位［規則（１）による］なので、細則＜３Ｂ＞により 2 つのグループにわけて考え、更に、それぞれの組に対して、1 ～ 3 位、4 ～ 6 位を決めてやる必要がある。3 名ずつの小リーグ１と２を検討すると、どちらも、3 者 1 勝 1 敗の 3 つどもえであることがわかる。するとこれは、前に表 - 7 の所で説明したのと同じ状態であるから、細則＜４Ｂ＞から＜４Ｃ＞を経て、結局、規則（５）に至り、前期順位の出番となる。

「2 勝 3 敗リーグ」の選手Ａ、Ｃ、Ｈの 3 名は、前期順位が 1、4、5 位と異なるため、細則＜５Ａ＞により、今期の部分順位はこの順番で 1、2、3 位、全体では 4、5、6 位となる。一方、「3 勝 2 敗リーグ」では、選手 3 名のうち選手Ｂが前期順位で最上位であるから、細則＜５Ａ＞により今期の部分順位も選手Ｆ、Ｇより上位なので、全体 1 位が確定。最後に、選手ＦとＧの順位の決定には、前期順位が同一のため、細則＜５Ｂ＞の適用が不可避となる。要は、2 人の同成績者を比較する細則＜２Ａ＞に戻って判定することになるわけで、直接対決の勝敗を見ることにより、選手Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｆ、Ｇ，Ｈの同星 6 名順位がようやく全部決定できたことになる（表 - １３）。

表 -13

今期	前期	＼	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	勝－敗
4	1	A	＼	●	○	○	○	○	●	●	○	○	６－３
1	3	B	○	＼	○	○	○	○	●	●	○	●	６－３
5	4	C	●	●	＼	○	○	●	○	○	○	○	６－３
１０	5	D	●	●	●	＼	●	●	●	●	●	○	１－８
7	5	E	●	●	●	○	＼	○	○	●	○	●	４－５
2	5	F	●	●	○	○	●	＼	○	○	○	○	６－３
3	5	G	○	○	●	○	●	●	＼	○	○	○	６－３
6	5	H	○	○	●	○	○	●	●	＼	○	○	６－３
8	5	I	●	●	●	○	●	●	●	●	＼	○	２－７
9	5	J	●	○	●	●	○	●	●	●	●	＼	２－７

もし、選手Ｂの前期順位が選手Ｆ、Ｇと同じだったとすれば、3 名のうちの 1 名を予め外してから判断することが不可能なため、細則＜５Ｃ＞に到達することとなり、結果、選手Ｂ、Ｆ、Ｇの間の順位が「決め切れなく」なることは、火を見るより明らかである。

これが、実際のリーグ戦で全 45 局の中で僅か 2 局だけ勝敗結果が逆だった際にもたらされた「はず」の事態である。何にせよ、自分が負かした相手が優勝というのは納得できない、という「影の声」に配慮したものが現行のルールではあるものの、同じ成績の選手の順位を最初から「前期順位だけで決める」のに比べて、恐ろしく手間暇労力が掛った上、なおかつ決め切れない場合が生じることは、諸

兄諸姉にはお認めいただけよう。

５.２　５名が同星となるリーグ表の例（その１）と順位付け

次に、実際の勝敗と 3 か所だけ入れ替える（●○）ことにより、6 勝 3 敗が 5 名となるリーグ表が作成できるので、これを検討しよう（表 - １４）。例によって、細則＜１Ａ＞と＜２Ａ＞を適用することにより決定した 5 名の順位（6 ～ 10 位）を、あらかじめ書き込んで置いた。なお、8 ～ 10 位は、前に出した例と同じく規則（1）により決定（この 3 選手のみ含む小さいリーグ表で 2 勝･1 勝 1 敗･2 敗）しているが､もしもＩとＪの対戦での勝敗が逆だったとすれば､「３すくみ」の 3 者同順位だから、結局、細則＜５Ｃ＞に拠ることとなって、決め切れなかったはずである。

表 -14

今期	前期	＼	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	勝－敗
	1	A	＼	●	○	○	○	○	●	●	○	○	6－3
	3	B	○	＼	○	○	○	○	●	●	○	●	6－3
6	4	C	●	●	＼	●	○	●	○	○	○	○	5－4
9	5	D	●	●	○	＼	●	●	●	●	●	○	2－7
7	5	E	●	●	●	○	＼	○	○	●	○	●	4－5
	5	F	●	●	○	○	●	＼	○	○	○	○	6－3
	5	G	○	○	●	○	●	●	＼	○	○	○	6－3
	5	H	○	○	●	○	○	●	●	＼	○	○	6－3
8	5	I	●	●	●	○	●	●	●	●	＼	○	2－7
１０	5	J	●	○	●	●	○	●	●	●	●	＼	2－7

次に、1 位～ 5 位を決めていく。前に挙げた例と同様に、5 名のみを含む小さな？リーグ表を作って見る（塗りつぶしが相当）。すると次のようになる（表 - １５）。

表 -15

今期	前期	＼	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	勝－敗
	1	A	＼	●	○	○	○	○	●	●	○	○	6－3
	3	B	○	＼	○	○	○	○	●	●	○	●	6－3
6	4	C	●	●	＼	●	○	●	○	○	○	○	5－4
9	5	D	●	●	○	＼	●	●	●	●	●	○	2－7
7	5	E	●	●	●	○	＼	○	○	●	○	●	4－5
	5	F	●	●	○	○	●	＼	○	○	○	○	6－3
	5	G	○	○	●	○	●	●	＼	○	○	○	6－3
	5	H	○	○	●	○	○	●	●	＼	○	○	6－3
8	5	I	●	●	●	○	●	●	●	●	＼	○	2－7
１０	5	J	●	○	●	●	○	●	●	●	●	＼	2－7

これを見ると､小さなリーグ表内の星取りは､3 勝 1 敗がＧのみで 1 名､2 勝 2 敗がＢ､Ｆ､Ｈの 3 名､1 勝 3 敗がＡのみで 1 名であることがわかる。更に､2 勝 2 敗の３名のみの小さなリーグ表（表記は省略）を見ると、3 者 1 勝 1 敗の３すくみであることがわかる。ここから先の作業を段階別に整理したものをまず表 - １６として示しておこう。

表 -16

選手名	今期成績（勝－敗）	小リーグ１（勝－敗）	小リーグ２（勝－敗）	前期（位）	決定分（位）	直接対決	今期順位（位）
G	６－３	３－１		5	1		1
B	６－３	２－２	１－１	3	2		2
F	６－３	２－２	１－１	5	３か４	勝	3
H	６－３	２－２	１－１	5	３か４	敗	4
A	６－３	１－３		1	5		5

即ち、順位（6 ～ 10 位が既に決定しているためここでは部分順位＝全体順位なので、単にこう呼ぶことにする）1 位のＧと 5 位のＡは「小リーグ１」の成績の優劣で自動的に決まる。次いで、Ｂ、Ｆ、Ｈの 3 者であるが、3 すくみのため、前期順位がモノを言うことになる。即ち、3 名の中で最上位だったＢが 2 位と決まる。残ったＦとＨの 2 者は、直接対決でＦが勝っているので、Ｆが 3 位、Ｈが 4 位と決まることになる（表 - １７）。

表 -17

今期	前期	＼	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	勝－敗
5	1	A	＼	●	○	○	○	○	●	●	○	○	６－３
2	3	B	○	＼	○	○	○	○	●	●	○	●	６－３
6	4	C	●	●	＼	●	○	●	○	○	○	○	５－４
9	5	D	●	●	○	＼	●	●	●	●	●	○	２－７
7	5	E	●	●	●	○	＼	○	○	●	○	●	４－５
3	5	F	●	●	○	○	●	＼	○	○	○	○	６－３
1	5	G	○	○	●	○	●	●	＼	○	○	○	６－３
4	5	H	○	○	●	○	○	●	●	＼	○	○	６－３
8	5	I	●	●	●	○	●	●	●	●	＼	○	２－７
１０	5	J	●	○	●	●	○	●	●	●	●	＼	２－７

もし、選手Ｂの前期順位が選手Ｆ、Ｈと同じだったとすれば、3 名のうちの 1 名を予め外してから判断することが不可能なため、又もや、細則＜５Ｃ＞に到達することとなり、選手Ｂ、Ｆ、Ｇの間の順位が「決め切れなく」なることが、火を見るより明らかである。

これが、実際のリーグ戦で全 45 局の中でたった 3 局だけ結果が逆だっただけでもたらされたはずの事態である。

５．３　５名が同星となるリーグ表の例（その２）と順位付け

最後に、実際の勝敗と 6 か所だけ入れ替える（●○）ことにより、6 勝 3 敗が 5 名となるリーグ表が作成できるので、例として示しておく（表 - １８）。小さいリーグ表の中では、各選手 2 勝 2 敗で「５すくみ」となっていることに注目されたい。

表 -18

今期	前期	＼	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	勝－敗
	1	A	＼	●	○	○	○	○	○	●	○	●	6－3
	3	B	○	＼	○	○	○	○	●	●	○	●	6－3
	4	C	●	●	＼	●	○	●	●	○	○	○	4－5
	5	D	●	●	○	＼	●	●	●	●	●	○	2－7
	5	E	●	●	●	○	＼	○	○	●	○	●	4－5
	5	F	●	●	○	○	●	＼	○	○	○	○	6－3
	5	G	●	○	○	○	●	●	＼	○	○	○	6－3
	5	H	○	○	●	○	○	●	●	＼	○	○	6－3
	5	I	●	●	●	○	●	●	●	●	＼	○	2－7
	5	J	○	○	●	●	○	●	●	●	●	＼	3－6

前期順位に差がある選手がいるので、順位付けは何とか可能と思われる（読者の明察にお任せします）が、5 名とも前期順位が同一の場合は、結局、細則＜５Ｃ＞に到達するため、全くの「お手上げ」となることは見易いであろう。

６．考察

福井県囲碁最強位戦のような総当たりリーグ戦で、概略、
（1）勝ち星の多い選手が上位
（2）直接対決の勝者を上位
（3）前期順位の上位が今期も上位
の順に適用して選手の順位付けの判定を行う場合、同じ勝ち数の選手だけを含む「小さいリーグ表」の中で部分順位を付ける必要を生じることは、まず不可避と見て良い。そこで、前期同順位者が 3 名以上含まれた場合、先に挙げた細則＜５Ｃ＞に到達して決め切れない確率がどの程度あるのかを、数理的に検討しておくことにする。なお、最強位戦は、今年度は例外的に前期同順位が多かった(7 名)が、通常の最大数は 5 名であるから、同星 3 名、4 名、及び 5 名の場合について検討しておくことにする。

６．１　同星３名のときの小さいリーグ表の分析

①２勝・１勝１敗・２敗のとき→順位確定
※②３名とも１勝１敗のとき→前期順位が３名同一なら未確定
発生確率は、①＝ 75 %（＝ 6 / 8x100）、②＝ 25 %（＝ 2 / 8x100）。
なお、※を付けた場合の、前期順位が 3 名とも異なる場合と前期順位が同一の選手が２名の場合（決め切れる）、については以下ではいちいち言及することは省略する。

６．２　同星４名のときの小さいリーグ表の分析

①３勝・２勝１敗・１勝２敗・３敗が各１名のとき→順位確定
②２勝１敗が２名と１勝２敗が２名のとき→順位確定
※③３勝が１名と１勝２敗が３名のとき→３名が前期順位同一なら未確定
※④２勝１敗が３名と３敗が１名のとき→３名が前期順位同一なら未確定
発生確率は①と②＝各 37.5 %（=24/64x100）、③と④＝各 12.5 %（=8/64x100）。
③＋④＝ 25 %。

６．３　同星５名のときの小さいリーグ表の分析

①４勝・３勝１敗・２勝２敗・１勝３敗・４敗が各１名のとき→順位確定
※②４勝１名・３勝１敗１名・１勝３敗３名のとき→３名が前期順位同一なら未確定
※③４勝１名・２勝２敗３名・４敗１名のとき→３名が前期順位同一なら未確定
④４勝１名・２勝２敗２名・１勝３敗２名のとき→順位確定
※⑤３勝１敗３名・１勝３敗１名・４敗１名のとき→３名が前期順位同一なら未確定
⑥３勝１敗２名・２勝２敗２名・４敗１名のとき→順位確定
⑦３勝１敗２名・２勝２敗１名・１勝３敗２名のとき→順位確定
※⑧３勝１敗１名・２勝２敗３名・１勝３敗１名のとき→３名が前期順位同一なら未確定
※⑨２勝２敗が５名→３名以上前期順位同一なら未確定

発生確率は、①と④と⑥＝各 11.7 %（=120/1024x100）、②と③と⑤＝各 3.9 %（=40/1024x100）、⑦＝ 23.4 %（=240/1024x100）、⑧＝ 27.3 %（=280/1024x100）、⑨＝ 2.3 %（24/1024x100）。
②＋③＋⑤＋⑧＋⑨＝ 41.4 %（＝ 424/1024x100）。

以上から、同星 3 名、4 名、及び 5 名の場合に、前期順位同一の場合に選手の順位を潜在的に「決め切れない」蓋然性は、相当高く存在していることが明かとなった。

７．他のゲームで認められている方法を援用する可能性

前々報[1)]で触れたように、近い成績同士が集中的に当たる不完全リーグで、参加全選手中での順位付けを行う方式として、スイス方式がある。[1 2)] 通常行われているのは、次に挙げた各インデックスを順次比較して最初に差が出た際に数字が大きい方を上位とする方式である。

①　勝ち数
②　対戦相手の勝ち数の合計（点数という）
③　勝った相手の勝ち数の合計

これで決められない時は、更に、

④　相手の勝ち数のうち最大と最小を除いた合計
⑤　より上位の選手に勝った者

を比較して順位付けを進めることになる。もちろん、勝ち数が同じでも直接対決がなかった同士の絶対的な順位は決め切れないわけであるが、常識的に言って、リーグの中で上位グループは、毎回「勝ち数の近い選手どうし」を対戦させるスイス方式のやり方だと、ほぼ総当たりしているはずであるから、通常の入賞者（1 位～ 8 位）を決めるための支障はまず無いと見て良い。

このような方式が、総当たりリーグ戦の順位付けに使えないかどうかを筆者が検討して見た所、成績がお互いに接近している場合には、上に記した③とか④の段階まで行っても同点となる場合が多く、総当たりリーグ戦では、スイス方式で使われている規則を援用して、確実に差を付けて順位付けができるという確証は得られなかった。何らかのやり方を無理やり考案することは可能であるが、複雑な規則･細則となることは免れず、万一、運営上でミスを犯したら取り返しが付かない。だとすれば、「決め切れない」ものは「決め切れない」ものとして潔く認め、あらかじめ対応策を用意しておく方が合理的と考えられる。

過去のプロ棋戦での例を見ると、毎日新聞社主催の本因坊戦の「挑戦者決定リーグ戦」は、1970 年代まで、前期順位を挑戦者や残留（シード）を決める際に全く利用せず、必ず対象者（同成績）で決定戦を行っていた。具体的には、挑戦者の場合は「勝ち抜き」トーナメント、残留の場合は「負け抜け」トーナメント。これは、総当たりリーグ戦の成績では差が付かなかった場合の選抜が、なるべく早期に決着でき、かつ、参加メンバーが最も納得し得る方法で行われていた、と言えよう。一方、日本航空主催の鶴聖戦（現在は廃止）は、当時の 4 大タイトル保持者＋予選通過者の合計 5 名による総当たりリーグ戦であったが、1982 年は６．３で発生確率が 2.3 % しかないと計算された、5 名とも

2 勝 2 敗という「５すくみ」となった。決戦が 5 名参加のトーナメントで行われたことは言うまでもない。[10)]

８．結論（提言）

総当たりリーグ戦で３すくみ（以上）の同成績者があり、かつ、前記順位でも同一の場合には、（１）勝ち星の多い選手が上位、（２）直接対決の勝者を上位、（３）前期順位の上位が今期も上位、の 3 つをベースとした現行ルール及びこれを筆者が成文化した改訂版の範囲では、確実に順位を付け切ることができないことが明かとなった。そこで筆者は、スイス方式（不完全リーグ）の順位決定ルールを参考にし、いろいろな検討を行ったが、目下の検討では、簡便な規則・細則をもって確実に順位付けを行い得る方法を見つけることに成功していない。追加規則を提案することは可能ではあっても、複雑になることが避けられないし、参加選手の誤解等により、かえってトラブルの火種となる心配すらある。

そこで、筆者としては、「決め切れない」事例は潔く認めることと、次のような対応策を立てておくことを提案し、本稿の結びとしたい。

（A）勝ち星の多い選手が上位、
　直接対決の勝者を上位、
　前期順位の上位が今期も上位、
　の３つをベースとしてリーグ戦の順位付けを行う方式は継続する。→規則（１）～（５）
（B）順位を決め切れない場合は原則として、該当選手による決定戦を行う。→規則（６）
（C）決定戦は原則として、トーナメント方式とする。→規則（７）
（D）優勝者と次期リーグ残留（シード）者の決定戦は必ず実施する。→規則（８）
（E）リーグ残留者のみ、リーグ陥落者のみを含む決定戦は行わず、同順位とする。→規則（９）

改めて日程調整して決戦（トーナメント）を行う理由は、世間の注目を集めるようにすることが、囲碁界の活性化に繋がると信じるからである。

９．あとがき

諸兄諸姉もよくご存じの通り、囲碁に限らず、「ボードゲーム」でアマチュア選手の参加する大会には、「ハンデ戦」「無差別」「クラス別」の３種類がある。力の強弱を表わす指標には「段級位」や「ポイント」(レーティング制)があるが、これは、正しく申告が成されていないとトラブルの元となるため、出来るだけ参加者が無差別モードで対戦できるように仕向けるのが運営的には可、ということになる。従って、「ハンデ戦」で開催される大会はごく少ない。「無差別」は強弱に関係なくハンデ無しで対戦させるが、自然、参加者はいわゆる強豪に限られるので、人数的にはそんなに多くならない。これに対し、「クラス別」は段級位で区分しその区分の中は無差別で対戦する方式であるため、大会全体ではかなり大人数になることが普通である。

以上の理由により、新型コロナウィルス禍下では、クラス別大会は、人数が多く密になってはいけないとの理由で開催されないことが多い。これに対し、筆者が出場する無差別の大会は、人数が少な目であることが幸いして、何とか工夫して開催していただいている。故に、筆者としては、打つ機会を与えてもらえているという責任感を持って、囲碁ファンのみんなを元気づけられるような内容の碁を力一杯打ち、発信する努力を続けたいと強く思うものである。

謝辞

一昨年、福井県と囲碁（１）を執筆した時以来、幾多の貴重な情報を迅速に提供していただいた、福井県囲碁協会の役員の皆さま、並びに、福井新聞社の丸山洋美さん、日刊県民福井の西前庄治さん、日本棋院福井県支部連合会の宇野幸巳さんに感謝の意を表します。

参考文献

１）高橋一朗，2019 年，福井県と囲碁（１）福井県アマ囲碁最強位戦について，
福井大学地域環境教育センター研究紀要 , 26 巻，p.99-116。
２）高橋一朗，2019 年，福井県と囲碁（２）新型コロナウィルス禍下に於ける 2020 年福井県囲碁界の軌跡について，福井大学地域環境教育センター研究紀要 , 27 巻，p.131-139。
３）福井新聞，2020 年 7 月 27 日付け紙面。
４）福井新聞，2021 年 3 月 22 日付け紙面。
５）福井県囲碁協会 FB（https://www.facebook.com/FukuiIgo/），2021 年同日付けレポート。
６）福井新聞，2021 年 4 月 13 日付け紙面。
７）福井新聞，2021 年 5 月 3 日付け紙面。
８）福井新聞，2021 年 6 月 15 日付け紙面。
９）日本棋院 HP（https://www.nihonkiin.or.jp/）。
10）囲碁年鑑 1983（「棋道」4 月臨時増刊号），日本棋院，1983 年 4 月。
11）「若越烏鷺春秋　日本棋院福井県支部連合会創立 30 周年記念誌」，
日本棋院福井県支部連合会、2014 年 11 月。
12）https://ja.wikipedia.org/wiki/ スイス式トーナメント。